

◆ 巻頭言

「おばさん会話力」は高いぞ！

中村 桃子

女のおしゃべりは「うるさいだけでくだらない」と言われてきたが、女たちは、子育て仲間やご近所、そして職場と、おしゃべりを通して支えあい、情報を共有してきた。年配の女性になると、長年培ってきたおしゃべり能力は、「おばさん会話力」とでも呼べるほどの技能に到達している。温かくて共感しあえる、説得力もある話し方だ。

おもしろいことに、最近多くの企業で、この会話力が注目されている。サービスやコミュニケーション部門では、おばさん会話力を期待してわざわざ年配者を雇用するらしい。そう言われると、マニュアル通りに受け答えする若者よりも、心のこもったおばさんの対応に救われることが多い。

けれども、ここが要注意だ。企業はおばさん会話力を安く見積もりすぎてはいないだろうか。おばさん会話力は、女性たちがさまざまな生きづらさの中から編み出した特別な技能である。家族や友人でなく仕事で使うのならば、もっと高く評価してもよいのではないか。さらに、身に付いた技能と言っても、心のこもった会話力をお客に提供し続けるのは相当疲れる。会話力が求められている介護、看護や接客といった分野の賃金が相対的に低いことも心配だ。男性でも、おばさん会話力をもっている人はいるはずだが、だからといって、会話力だけを期待される部署に送られることはない。

「くだらない」と言われていた「女のおしゃべり」が評価される時代になった。しかし、「主婦モニター」という名前で主婦の経験や知恵が安価に利用されてしまったように、おばさん会話力を安売りしてはならない。おばさん会話力には、ITを駆使したプレゼンテーションと同じぐらいの価値があるのだ。



PROFILE

中村 桃子
(なかもら ももこ)

関東学院大学教授。専攻は言語学。著書に『ことばとフェミニズム』『ことばとジェンダー』（以上、勁草書房）『「女ことば」はつくられる』（山川菊栄賞、ひつじ書房）『＜性＞と日本語 ― ことばがつくる女と男』（NHKブックス）ほか。共著に、『連続講義 暴力とジェンダー』（白澤社 2009）など。